◆ 講　演

アマゾンの守り人たちの抵抗運動を追う
～7月、ブラジル先住民族大集会を取材して

下郷　さとみ

編集部註

以下は、2023年12月2日に開催した下郷さとみ氏による講演を、同講師が加筆修正をし、まとめたものである。

みなさま、こんばんは。フリーランスのジャーナリストをしております下郷さとみです。ブラジルとの出会いは、もう30年も前になります。1992年から94年までの2年間、サンパウロ市のはずれの貧困地区に住み込んでボランティアをしたのがそもそもの始まりでした。保育園や学童保育などの子どもたちの教育活動に携わったのですが、当初は言葉も全くわからず、生活をともにするなかでポルトガル語を覚えました。その後、リオデジャネイロのファベーラに通うようになり、都市貧困層の権利運動など、ブラジルのさまざまな民衆運動の取材を続けています。

2014年から今年はじめまでの9年間は、アマゾンの先住民族の支援活動にも携わりました。東京にあるNPO法人熱帯森林保護団体（RFJ）の依頼を受けて、支援事業コーディネータとしてアマゾン川の支流であるシングー川流域の複数の民族と協働いたしました。今年はじめにRFJからは離れましたが、アマゾン熱帯林や先住民族とは、その後も、いち友人として、また取材者の立場で関わり続けています。

今日はたくさんの写真をお持ちしました。今年7月下旬に先住民族保護区の村で大集会が開かれまして、取材に行ってまいりましたので、その話題を中心に、また今年1月の政権交代をはさんで社会的状況はどのように変化したのか、その辺りも交えながらお話をしていきたいと思います。

Ⅰ．地球環境の守り人としての先住民の誇り

講演のタイトルは『アマゾンの守り人たちの抵抗運動を追う』としました。7月24日～28日に開かれた先住民族大集会は、まさにこの抵抗運動が集結する場でした。集会を主宰したのは中央の人物、ラオニ・メトゥティレ（Raoni Metyktire）です（**写真1**）。推定年齢90歳を超えるカヤポ民族の大長老であり、ブラジルの全先住民族の精神的支柱でもある、このラオニの呼びかけによって、全国から54の民族、およそ1000人がカヤポ民族のピアラス村に駆けつけました。

ラオニが開会式の壇上から、こんな力強い檄を飛ばしていました。「森が清らかな水と空気を

写真１　先住民族大集会でラオニ長老を囲んで
（2023年７月筆者撮影）

生む。森が人類全ての命を、地球の全ての生き物の命を支えている。森を守れ、全先住民族の力を結集して立ち向かえ！」

ラオニは生涯をかけて森を守れと訴え続けてきた人です。『ブラジルの社会思想』（2022、現代企画室）で、第13章、ラオニ・メトゥティレの章を執筆担当いたしました。ラオニの人生を追いながら先住民族の権利運動を時系列でまとめるとともに、先住民族の精神世界について考察を加えた論稿です。読んでいただけたら幸いです。

集会では、取材撮影のため全日程に張り付きました。印象に残ったのが若い世代の活躍でした。気候変動や生物多様性の問題に結びつけて語る若いリーダーが何人もいました。たとえば写真の女性は30歳のタイリ・テレーナ（Taily Terena）。セラード（サバンナ）に暮らすテレーナ民族の人です（**写真２**）。彼女は壇上からこのように語りかけました。

写真２　先住民族大集会でスピーチするタイリ・テレーナ
（2023年７月筆者撮影）

「国連の報告によれば、世界の先住民族は全人口の5パーセントを占めるにすぎない。けれど、先住民族が生きる土地に地球の全生物種の8割が存在している。私たち先住民族が地球の生物多様性を守る鍵を握っている。豊かな多様性を守ることは、気候変動から地球を守ることでもある」と。

またタイリたち若い世代が、「地球環境問題をめぐる国際的な会議の場に、キーパーソンである私たち先住民族の公式参加枠が用意されるべきではないか」ということを議論し合っていたことに感銘を受けました。

2025年の第30回国連気候変動枠組条約締約国会議（COP30）は、アマゾン河口の都市ベレンで開かれます。まさにいまドバイでCOP28が開かれており、ブラジルの先住民も大勢参加しています。先住民のリーダーたちは、地元での開催となるCOP30に向けて今後2年かけてさまざまなアクションを準備していくはずです。

今年は本当に記録的な酷暑でした。「7月7日、世界平均気温が観測史上、過去最高の17.24度を記録した」という報道がありましたが、集会の取材中も本当に暑くて大変でした。今年はブラジルでも異常気象が多発しました。

9月にブラジルの南端のリオグランデドスル州で大きな洪水が起きました。9月から10月にかけてはアマゾン地方を大旱魃が襲いました。アマゾン川の主要な支流のひとつにネグロ川があります。北から南へ流れてアマゾン川の中流あたりに合流する大きな支流ですが、このネグロ川のさらに支流の一部では、川底が完全に干上がってしまいました。水温が上昇して40度を超えた水域もありました。魚が水面に大量に浮いている様子や、アマゾンカワイルカやアマゾンマナティが死んでいる様子を記録した写真や動画がブラジルのSNSに多く出回っていました。ある湖でカワイルカが100頭以上死んだという新聞報道も目にしました。

国立宇宙研究所（Instituto Nacional de Pesquisas Espaciais - INPE）の報告によれば、ブラジル国内では、1961年～2020年の60年間で最高気温が最大3度も上昇した地域がありました。顕著だったのはアマゾン北西部、ベネズエラ、コロンビア、ペルーとの国境地帯、それからブラジル北東部バイア州の内陸部です[1]。

後者はもともと半乾燥地域ですが、高温化とともに乾燥化も進んでいます。この30年間の観測データを基にINPEと国立自然災害観測警告センター（Centro Nacional de Monitoramento e Alertas de Desastres Naturais - CEMADEN）が分析を行った結果、ブラジル国内で砂漠とみなされるエリアが観測史上初めて確認された、と今年11月に報道されていました[2]。

ブラジル南東部のサンパウロやリオデジャネイロでも、11月に体感温度が50度を超える日が続いたそうです。11月といえばまだ初夏です。今年は非常に大きなエルニーニョが発生しているせいですが、これも含めて地球規模の気候変動が要因だと言えるのではないでしょうか。

Ⅱ．前政権下で拡大したアマゾン森林破壊

今年は1月1日に政権が交代してボルソナロ大統領からルーラ大統領に代わりました。先住民族社会は、この政権交代を大いに歓迎しています。ボルソナロ政権下の4年間は、先住民にとっては、まさに耐え忍ぶという状況でした。ボルソナロ政権時代のアマゾン熱帯林破壊の問題。これは、違法行為の監視摘発予算が大幅に削減されてしまった影響がとても大きかったです。

違法行為には、さまざまなものがあります。たとえば、保護区の森の中に不法侵入して行う金の違法採掘。採掘所のことをガリンポ、そこで働く採掘人をガリンペイロと呼びますが、これらガリンペイロの活動がボルソナロ政権下では非常に活発化しました。保護区の森からマホガニーやイペーなどの高級木材を違法に切り出す盗伐も深刻です。牧場主が保護区に不法侵入し、森を伐採して火をつけて焼け跡に肉牛を放して、ここは自分の牧場だと主張する。このような不法占拠による牧場の開設行為もあります。

野焼きは原則として自身の農牧場の敷地内でも禁止です。また、森林法が定める農牧場の残置森林率はアマゾン地域では最低80パーセントです。農地として開墾してよいのは敷地面積の2割までで、残り8割は森林のまま残さなければなりません。ですが、これらの規則はほとんど守られていません。規則を守らなくても取り締まらない、検挙されて罰金刑が下されたとしても罰金を払わない。このような状況です。

ボルソナロ政権下の4年間は、これらの違法行為が野放しに近い状態になりました。「大統領もアマゾン開発を推進している」「開発とは森林をどんどん切り開くことだ」「取締りもない。たとえ違法でも大統領のお墨付きを得た行為だ」という空気感の蔓延が、アマゾンの森の破壊拡大に大きく寄与したのではないかという印象を私は持っています。

ほかにも前政権は、保護区内の土地を不法占拠して開かれた大農牧場に恩謝を与えて正規の農地として認めるという施策や、そこに暮らす先住民族との事前協議なしに保護区内で地下資源開発を可能にする法案などを推進していきました。

先住民族社会を切り崩して囲い込んでいく動きも目に付きました。先住民族社会も一枚岩ではありません。近隣の大農場主と提携した民族が自身の保護区内で米や大豆の大規模栽培に取り組むという事例が既にいくつか存在します。ボルソナロは「インディオも発展を望んでいるのだ」という言説を使って、このような取り組みを称賛し、インセンティブを与えました。

そして、今年1月1日。ルーラ政権が発足して、アマゾンと先住民族をめぐる政策は前政権から180度転換したわけです。ルーラは就任目前の2022年11月、エジプトで開かれたCOP27に駆けつけて、2030年までにアマゾンにおける違法伐採をゼロにすると宣言しました。また、先住民族社会と交わした公約を守りました。大統領選では先住民族社会はルーラ候補の支持に立ったのですが、その際に、先住民族省を創設して初代大臣は先住民族社会が選んだ人物を任命するという公約を引き出したのです。

先ほどお話ししたように、2025年のCOP30はアマゾン河口の都市ベレンで開かれますし、今年8月にはルーラ大統領の呼びかけで14年ぶりにアマゾンサミットが、このベレンで開かれました。アマゾンを擁する9か国・地域が連携して積極的にアマゾン熱帯林を守っていこうというルーラ政権の姿勢が、サミットでは強く打ち出されました。

ただ、政権交代したとはいえ、国会ではアグリビジネス推進派の議員が多数を占めています。5月には、先住民族の土地への権利を著しく制限することになる法案が下院で可決されました。これは、時間基準点（Marco Temporal）という概念を法制化するものです。憲法の施行日である1988年10月5日の時点にその土地での居住実態がなかった民族には先住権の主張を認めない、とする概念です。植民地化の過程で、また軍事政権下で先住の土地を追われた民族は少なくなく、

先住民族社会はこの法案に強く抵抗しています。7月の集会も、法案に抗議し、内外の世論を高めるのが目的でした。88年憲法については、後ほど詳しくお話しいたします。

Ⅲ．先住民族社会の多様性と法的権利

ブラジルは本当に広い国です。バイオーム（生物群系）も多様です。アマゾン熱帯雨林。セラードと呼ばれるサバンナ。半乾燥地帯のカアチンガ。ここが先ほどお話しした、砂漠化の進行が懸念される場所です。熱帯湿原のパンタナール。温帯草原のパンパ。そして大西洋沿岸部に南北に走るマタアトランチカ。日本語に訳せば大西洋岸森林で、もとの面積の十数パーセントしか残されていないという貴重な熱帯林です。このように、ブラジルには多種多様な生態系がありますが、今日は主にアマゾン地域についてお話しいたします。

アマゾン川は地上の淡水の15パーセントが存在する、世界最大の淡水貯蔵庫です。その流域は南米8か国と1地域に分布しています。そのうちブラジルが占める割合が63パーセントにも及びます。ブラジルの行政上、法定アマゾンと呼ばれる地域は日本の国土面積の11倍にもなります。

全国の先住民の人口は、今年発表された国勢調査2022によれば169万人。2億人を超えるブラジル全人口のわずか0.83パーセントにすぎないマイノリティです。そのいっぽうで、民族多様性という面では非常に豊かな社会を形作っています。民族数は全国に305、言語の数は274言語を数えます。これは前回の国勢調査2010のデータです。話者がいまは数人しか残っていないという稀少言語も少なくありません。

私が通ってきたアマゾン南東部、シングー川の上流域の保護区には16民族が暮らしていますが、その多くが、人口300人前後という小さな民族集団です。近隣同士の村でも民族も言語も異なる場合は、共通言語はブラジルの公用語のポルトガル語になります。けれど、複数の民族言語が話せるという人もいまして、やはり彼らはもともとは文字を持たない文化でしたから、かわりに耳がすごくいいのではないかと思うんですよね。耳で聞いて覚える。

シングー川の上流域の多くの民族が、結婚すると夫が妻の家に入って同居するという母系社会ですが、さまざまな民族が集まる大きな祭りが出会いの場になっているそうです。言語が全く異なる民族同士が結婚する場合もあるようです。そんなケースの知り合いの夫婦は夫のほうが妻の民族の言葉もぺらぺらで、「すぐに覚えた。愛の力だよ」と言って笑っていましたが、本当に彼らは耳がいいのだなと感心しました。

全国の先住民169万人のうち、51パーセントがアマゾン地域に、37パーセントが先住民族保護区に暮らしています。先住民族保護区とは、先住権と占有権、つまり居住と土地利用の権利が保障された土地を指します。言い換えれば、全国の6割以上の先住民が土地の権利が保障されない状態に置かれていることになります。もちろん、学業や仕事などの関係で都市部に住む先住民も少なくありませんが、保護区の認定を求めて何十年も闘い続けているという民族が各地にいます。

先住民族の法的権利について簡単にご紹介します。1985年に軍事政権が終わり、1988年10月5日に現在の憲法が施行されました。起草の過程では、憲法制定国民会議が設置されて、2年近くかけて議論を重ねながら中身が練り上げられていきました。そこには、さまざまな市民セクターの声が盛り込まれました。先住民族社会も、自身の権利に関連する部分を独自に起草して憲法制

定国民会議に提出しました。この草案を読んでみると、実際の憲法の条文とそんなに変わりません。先住民族の声が大いに反映された憲法ができたと言えると思います。

ブラジルの憲法は理想主義的な、非常によくできた憲法だなと本当に感心するんですけれども、先住民族を巡る条文についても同様です。この88年憲法によって、初めて彼らがブラジルの先住民族であると明記されるとともに先住権と土地の占有権が保障されました。さらに憲法は、先住性が認められる全ての土地について、保護区の認定を憲法施行日から5年以内に終了しなければならないと規定しています。5年以内というと1993年が期限ですが、しかし全く守られていません。先住権の所在を主張する土地の保護区認定を求め続けている民族が、全国各地にまだたくさんいるのです。先ほどお話しした時間基準点の概念が法制化されてしまえば、多くの民族が土地への権利を失ってしまうでしょう。

憲法には次のような規定も盛り込まれました。先住民は固有の文化を持つ人たちであり、それを保持する権利を国は保障しなければならない。固有の文化に配慮した教育や医療サービスを国は保障しなければならない。これらの条文に従って、先住民の権利を擁護する制度が整備されていきました。たとえば学校教育。シングー川の上流域では、ここはマトグロッソ州ですが、たいていの村に州立の学校が整備されています。ブラジルの義務教育は9年間で、教師講習を受けた村の若者が民族言語とポルトガル語のバイリンガルで授業を行っています。高校の教育課程を併設する学校も増えてきており、そこには専科教員資格を持つ非先住民が州政府から派遣されています。近年は大学に進学して教員資格を得る先住民の若い世代も増えています。

ブラジルで教育といえば、偉大な教育学者パウロ・フレイレの名前が必ず出てきますけれども、先住民の村の学校の授業を見ていると、ここにも彼の思想がしっかり根付いていることを実感して感動します。政府支給の教科書どおりに教え込む、知識を詰め込むという授業ではなくて、先生自身がいろいろと工夫して、民族の文化に配慮した授業を組み立てたり、教材を手作りしたりしています。自分たちにとってどんな教育が必要かを先住民自身が考えて作り上げていく、教師と生徒が共に学び合うような教育が行われていることを実感しました。

ところで、先住民族保護区について何度か言及してまいりました。保護区と略して申し上げてきましたが、自然環境を保全する枠組みには自然保護区もあります。これにはいくつかの種別があり、管理主体は主に州立と連邦立（国立）です。自然保護区と先住民族保護区には大きな違いがあります。自然保護区は議会の承認によって指定解除が可能だという違いです。たとえばパラ州では州議会の採決によって州立の自然保護区が一部指定解除になりました。道路建設計画のためです。

反面、先住民族保護区は憲法で保障された権利なので、国会の採決で保護区認定の取り消しはできません。ですから、7月の大集会でも先住民族のリーダーたちは「自分たちがここに暮らしていることそのものがアマゾンの森を守ることにつながっている。私たちが森の守り人なのだ」と、誇りを込めて語っていました。

Ⅳ．シングー川流域の先住民族の暮らしと「里山」

ここからは、私が2015年から通ってきたシングー川の上流域の写真を見ていただきながら、お

写真３　シングー川上流域の保護区の森
（2015年筆者撮影）

写真４　シングー川
（2018年筆者撮影）

話を進めます。この地域の民族がブラジル社会と初接触を持ったのは、1950年代から60年代くらいにかけてのことでした。つまり、ほんの70年前までは新石器時代を生きていた。金属や文字を持たない、日本でいえば縄文時代のような暮らしが最近まであったという地域です。人類数千年の歴史を、彼らはわずか数十年で駆け抜けてきました。

NGOの支援活動の視察時に小型飛行機で上空から撮った写真です。周囲360度、地平線まで緑のじゅうたんが広がっています（**写真３**）。日本の感覚では森は山にあるもの、斜面にあるものですよね。このように地平線まで真っ平らな森というのは、世界でもなかなかない場所ではないかと思います。

これがシングー川です（**写真４**）。７月に集会があったピアラス村のすぐ近くの写真です。ここは中流に近いあたりで、川幅は400メートルほどです。乾期の終盤の写真ですから、相当、川底が見えています。ご覧のとおり、川底は砂です。川での移動は船外機付きの８メートルほどのアルミボートを使うのですが、走っていると風が飛ばす砂がバシバシ顔に当たってきて痛いほどです。

源流に近くなると川幅も細くなっていきます。この写真でお気付きの点がないでしょうか。川べりに丸い白い点が見えませんか。これが先住民族の村です（**写真５**）。保護区の上空を飛んでいると所々に丸い点のように村が見えてきます。川は道路代わりであり、川魚という重要なタンパ

写真５　シングー川と先住民族の村
（2018年筆者撮影）

写真６　カマユラ民族の村
（2015年筆者撮影）

ク源の供給場所です。川の近くで雨期でも氾濫しないような場所に、うまく村が作ってあるなと感じます。

乾期の終盤に川をボートで移動していると、船底が川底の砂をこするほど水位が下がっているのを感じます。水が深い場所を探しながら進むので移動にとても時間がかかります。先住民の長老たちは「昔は乾期でもこんなに川の水は減らなかった、ボートで移動するのはこんなに大変ではなかった」と言っていました。「雨期でもあまり雨が降らなかったり、逆に酷い集中豪雨があったりで、この20年ほどは気象がおかしくなっている」という話を年配者からよく聞きます。

写真はシングー川の上流域に暮らす民族のひとつ、カマユラ民族の村です（**写真6**）。丸い広場を取り囲むようにして等間隔に家が並んでいます。上流域では多くの民族に共通して、このような巨大な総茅葺の家を作る伝統文化があります。村の周囲には、うっそうとした森はありません。焼畑と、焼畑が再生した二次林、三次林が村を取り囲むようにして広がっています。そして、その先が、原生林の世界になるわけです。

2015年に初めて支援活動で村に入りました。そのとき感じたのが「ここも里山だ」という感覚でした。私はいま、千葉県の房総半島の南の端っ子の過疎の農村に暮らしています。自分が食べるものは自分で作ってみたいという気持ちで、18年前に東京を脱出して移り住みました。山あいに棚田が広がる、「まさに日本の里山」という風景の地域です。そして、アマゾンの先住民族の村でも「ここも里山だ」と感じました。

そもそも里山とは何か。これは私が考える定義ですけれども、自然は人間にとって過酷な存在です。そのような自然に対して、壊さない程度に、いまふうの言い方をすれば持続可能な方法で働きかけて手を加えることで、人が居場所と生活の糧を得る場所。それが里山ではないかと思っています。そのような視点で見てみると、アマゾンの先住民族の村でも「まさにここも里山だ」と実感したのでした。

まず、「住」です。家を建てる材料は、すべて村の周囲の森から調達します。村人によれば、この地域独特の総茅葺の家（**写真7**）を1軒建てるのに、およそ40種類の植物を使うそうです。村の周りには茅場があります（**写真8**）。昔は日本の山村にも必ず茅を採る場所、茅場があって、それは入会地として、つまり村の共有地として管理されていました。それと全く同じ風景が、入会

写真7　シングー上流域の民族の総茅葺の家
（2019年筆者撮影）

写真8　先住民族の村の周りに広がる茅場
（2015年筆者撮影）

地としての茅場が先住民族の村にも広がっています。茅の葺き替えは大変な作業です。日本では結（ゆい）と呼ばれる村人総出の共同作業で行われました。家主はごちそうをたくさん作って皆に振る舞います。これも同じことがアマゾンの村でも行われています。

彼らが使う茅はチガヤの一種です。村の茅場に連れて行ってくれた人に「まさか植えたのではないですよね」と尋ねたら「もちろん違う」と言います。森の木を切って火を入れて焼畑を作った後、森が再生するかわりに茅がわっと生えてくる場所があって、それを大切にしているそうです。イネ科の植物ですから採ってもまた生えてくるのですけれども、ずっと採り続けているとだんだん茅の背丈が短くなってきてしまう。茅が短いと屋根を葺くには不都合ですので、苗を取って別の場所に植え替えて、新しく茅場を作ることもあるという話を聞かせてくれました。

次に「食」です。シングー川の上流域には、森と川の恵み豊かな自給自足の暮らしがまだ残っています。シングー川で捕れる多種多様な魚が日々のタンパク源です。ペッカリーやバクやサルなどの獣の肉も食べます。ただ、毎日捕れるものではないので、狩りの獲物はたまのごちそうで、狩りという行為そのものも楽しみの色合いのほうが強いのではないか、という気がしました（**写真9**）。

主食はキャッサバから取り出したでんぷんで作るベィジュという食べ物です。でんぷんを水で軽く湿らせて素焼きの土鍋の上に広げて焼くと、表面がかりかりで中はもっちりとした厚めのク

写真9　ペッカリーと魚を焼いて食事の準備
（2018年筆者撮影）

写真10　キャッサバでんぷんで作るベィジュが主食
（2018年筆者撮影）

写真11　焼畑の火入れ
（2016年筆者撮影）

写真12　村の周囲に広がるキャッサバ畑
（2015年筆者撮影）

レープみたいなものができます。これがベィジュです（**写真10**）。

キャッサバは村の周りの焼畑で栽培されます。先住民族の伝統的焼畑の火入れに何度も立ち会いました（**写真11**）。焼く面積は1反歩ほどでしょうか。10アール、およそ1000平方メートルです。日本の平地にある水田は1枚が2反歩くらいですが、焼畑の面積は広くてもせいぜいその程度です。木を倒して1か月ほど乾してから火を入れて、灰を肥料にしてキャッサバを栽培します（**写真12**）。

私は出身が石川県で、母方のルーツは白山麓にあります。標高600メートルほどの山村ですが、戦後しばらくまで焼畑が行われていました。祖父母の村があった所で焼畑体験に参加したことがあります。日本の山村の急斜面で行う焼畑と、平たい場所で行うアマゾン先住民の焼畑は方法がずいぶん違います。白山麓の焼畑は灰しか残らないほど、じっくりと焼いていきますが、先住民の焼畑は、あっという間に燃えてしまって木の燃えかすがけっこう残ります。これは薪に使います。調理や夜の暖を取るのに毎日たくさん必要な薪を畑から取ってきていました。

畑を観察すると、火を入れて1年もたたない地面のあちこちから木の芽がたくさん生えているのに気付きました。森の木の種の芽吹きです。焼いて数年もすれば灰の肥料分がなくなって土がだんだん痩せていく。だから別の場所に移動して新たに火を入れるわけですが、あちこちから木が生えてきて森に戻っていくことも、移動の理由なのだと理解しました。畑を移動しながら十数年で元の場所に戻ってくる。そういうサイクルで焼畑は行われるそうです。

私も農業のまねごとをしているので想像できるのですが、このような気候の場所で有機肥料を準備して畑に施して土作りをするのは現実離れしています。先住民族が行う小規模の伝統的焼畑は、アマゾン熱帯林という自然環境、気候、土壌に最も適した持続可能な農業技術、土作りを必要としない農業技術なのだということに感銘を受けました。

V．テクノロジーを運動の武器に

シングー川の上流域は伝統文化がまだ色濃く残る貴重な地域です。と同時に、この人たちも同じ地球の上で、私たちと同じいまを生きている。彼らも同時代人だということを強く感じました。

祭りでは皆、正装します。裸の体に植物の色素でペインティングを施して、頭の羽根飾りなど

写真13　正装姿で祭りに参加する人々

（2016年筆者撮影）

の装飾品を身につけるのが彼らの正装です。この祭りの写真の右端のほう、お気付きでしょうか。正装してスマホを構えて撮影している人たちがいます（**写真 13**）。スマホを持つ人は、いまはそんなに珍しくありません。カメラとして、またダウンロードした音楽を聴くツールやコミュニケーションのツールとしての利用がメインです。

保護区の奥地の村でもここ数年、衛星インターネットの普及が進んでいます。電話回線の電波は届きませんが、通話アプリを使ったテキストチャットや会話が可能です。以前は大きなパラボラアンテナを設置していましたが、ここ1、2年でスターリンク社の衛星インターネットキットの普及が急速に拡大しています。アクセスパスワードは、村のリーダーやプロジェクトの担い手の人たちだけに公開されている場合が多いようです。

インターネットの活用方法は、テクノロジーを運動の力にするという目的が明確です。権利運動、文化の伝承運動、教育運動に活用する。これらの運動の推進には、情報の収集、記録、発信、交換が欠かせません。インターネットがなければ、保護区の外でいったい何が起きているのか、いま政治がどう動いているのか、目まぐるしく動いていく状況をキャッチできません。情報を得て要求や抗議の声を上げていく。テクノロジーはそのために必要なツールだと位置付けられています。

とても力強い民族運動が存在します。社会的弱者としてただ守られるだけの存在なのではなく、先住民族自身が主体となって運動を作り上げていく、動かしていく。ブラジルでは、このような当事者主体の運動のあり方を「プロタゴニズモ」と呼びます。さまざまな社会運動の現場で常に耳にする言葉ですが、先住民族の運動の場でも、このプロタゴニズモが発揮されている姿を見ることができます。

近年は大学や大学院に進学して専門的な知識や資格を得る若い世代もたくさん出てきています。弁護士を目指す人が多いという印象です。法律の知識は運動を動かしていくのに欠かせません。主要な先住民族運動体には顧問弁護団が必ずいて活躍しています。女性の活躍も目覚ましいです。

運動シーンで彼らが訴えているのは、これらのことです。「保護区の認定（demarcação）を進めろ」「先住民族の権利を侵害するような法案に反対」「ブラジルが批准しているILO169号条約を遵守せよ」という内容です。

ILO169号条約は、先住民族の生活や権利に影響を及ぼすような開発計画について、先住民族と事前協議を行わなければならないと定めています。このため、各地域や各民族単位で事前協議プロトコルの作成が進められています。開発計画を前にして、政府や開発事業者とどのように協議を行うかという独自のガイドラインを作るという動きです。

さて、ようやく本題の先住民族大集会の話になります。集会には全国から54の民族、およそ1000人が集まりました。冒頭でお話ししたように、本当に若い世代の活躍が目覚ましかったです。特にテクノロジーの活用が強く印象に残りました。社会的マイノリティ自身が独自のメディアを持って情報発信していくという、ブラジルの社会運動シーンで非常に盛んなコミュニティ・コミュニケーター（comunicador comunitário）の運動が、先住民族社会でも積極的に取り組まれています。

写真14　集会を取材撮影するコミュニケーターたち
（2023年筆者撮影）

写真15　撮影した動画をプレスルームで編集する
（2023年筆者撮影）

集会会場にはWiFi完備のプレスルームが用意されていました。先住民コミュニケーター（comunicador indígena）と名乗る若者たちがスマホや一眼カメラを使って集会のようすを写真や動画に記録し、プレスルームでノートブックパソコンを開いて編集ソフトで編集して、すぐにSNSにアップロードする。そういう一連の流れを皆がさくさくと行っていて、とても見事でした（**写真14、写真15**）。

全国各地の先住民族の村で映像集団が続々と誕生しています。保護区の森への侵略行為や違法伐採行為をドローンなども駆使して撮影してSNSに投稿して告発するということが、いまはできる時代になりました。インスタグラムで村からまめにライブ配信を行う若いリーダーも大勢います。

もうひとつ、集会でとても印象に残ったのが、政治の舞台への先住民の進出です。これは今年からの新たな大きな動きです。昨年は大統領選挙と同時に国会議員選も行われ、先住民アクティビストの女性が2人、下院議員に当選しました。また、先住民リーダーが何人もルーラ政権に参画することになりました。

写真（**写真16**）の真ん中にラオニ長老がいます。その向かって右側の女性がソニア・グァジャジャラです。昨年の選挙で下院議員に当選し、そして先住民族省の初代大臣に任命されました。

写真16　国会と政権に参画を果たした先住民リーダーたち
（2023年筆者撮影）

ソニアは先住民族の全国ネットワーク組織であるブラジル先住民族連携（Articulação de Povos Indígenas do Brasil - APIB）の代表を9年間務めた人です。写真の左端の女性、ジョエニア・ワピシャナは、先住民族の権利擁護行政を担う国家機関FUNAI（国立先住民族基金）の長官に任命されました。当事者である先住民が長官になるのは1967年のFUNAI設立以来、初のことです。ジョエニアは先住民女性として初めて弁護士資格を取得した人で、2019年から1期、下院議員を務め、史上2人目、当時唯一の国会議員として活躍しました。

ラオニの左側の女性はセリア・シャクリアバ。昨年の選挙で下院議員に当選したもうひとりの人です。セリアの左の男性は保健省先住民族特別保健局（SESAI）のヒカルド・ウェイビ・タペバ局長。ソニアの右の女性は先住民族省先住民権利推進連携局のジュマ・シパイア局長。他にも若い世代の先住民リーダーが何人も政府の要職に就きました。

Ⅵ. 深刻な森林火災と乾燥化の進行

これだけ力強い運動が展開されているのは、それだけ危機が迫っているからにほかなりません。特に乾期の終盤には毎年、大規模な森林火災が発生します（**写真17**）。「広大な面積が焼失した場合は、森林が再生するのには50年はかかる。再生せずにサバンナになってしまうかもしれない」という話をブラジルの専門家から聞いたことがあります。森林を失えば乾燥化が、さらに急速に進みます。悪循環です。

シングー川の上流域の周辺は大規模農業開発の最前線の地域です。1軒の敷地面積が数千ヘクタールという大規模農牧場がパッチワークのように森を切り取って広がっています（**写真18**）。肉牛の牧場、そして大豆やトウモロコシ、綿花などの主に輸出用の換金作物の栽培農場です。アマゾン地域の農地の8割が肉牛牧畜用の放牧地、つまり草地で、全国の肉牛の4割がアマゾン地域で飼育されています。しかし、大豆のほうが利益が大きいことから、牧場から大豆畑への転換が進んでいます。見渡す限り地平線まで木が1本もないような広大な畑です。作物が何もない端境期となる乾期終盤の農場には砂漠にしか見えない光景が広がっています（**写真19**）。

Google Mapで衛星写真を見ると、シングー川流域では保護区の境界線がはっきりわかるほど、ぎりぎりまで開発地が迫っています。乾期になると大規模開発地から保護区の中に乾いた熱風が

写真17　いったん森林火災が起きれば雨期が来るまで燃え続けることも珍しくない

（2016年筆者撮影）

写真18　シングー上流域の先住民族保護区に隣接する大規模農牧場

（2015年筆者撮影）

写真19　シングー上流域の先住民族保護区に隣接する大豆農場
（2016年筆者撮影）

吹き込みます。こうして残された保護区の森でも乾燥化が進んでいくのです。

大豆開発の最前線の町にマトグロッソ州シノッピ市があります。7月の集会が開かれた保護区のすぐ西側に位置する人口およそ20万人の都市です。シノッピの町は50年前に熱帯林を切り開いて建設されました。軍政時代に軍隊を投入して道路を敷設して、道路沿いに町を拓きました。集会会場の村にはシノッピを経由して向かったのですが、8年ぶりのシノッピは、ますます発展拡大していました。もとからセラード（サバンナ）だったのかと思えるような乾いた風景で、50年前までここがアマゾン熱帯林だったとは全く想像もできません。

アマゾンの南側に広がるセラード地域では、70年代頃から大規模農業開発が始まりました。これによってブラジルは世界有数の大豆の生産国かつ輸出国になったわけです。その大豆開発前線がセラードからどんどん北上してきた。それによってアマゾンの森林破壊も進んできたという経緯があります。Mapbiomas[3] というサイトでは、通信衛星のデータベースを基に森林の破壊状況を時系列でマッピングすることができます。観測が始まった1985年から見ていくと、シングー川流域では、森に覆われていた一帯が年を追うごとに切り開かれて、緑の孤島のように保護区だけが残されていくのがわかります。

シングー川流域の保護区の森を歩くと、林床にある落ち葉は層が薄くて、手でちょっと払えばすぐに砂地の地面が出てきます。砂地の痩せた土壌です（**写真20**）。木立がない所は砂漠にしか見えないような赤茶けた光景です（**写真21**）。乾期の終わりには気温が日陰で40度近く、湿度は十数パーセントまで下がります。風が吹くと砂嵐が起きる。それほど乾燥化が進んでいます。林床の落ち葉はカリカリに乾き切っていて、歩くと足の下でバリバリと音を立てるほどです。

長老世代は「昔は乾期の終わりでも森の中はしっとりと湿っていた」と言います。焼畑の火入れの際には、火が周りの森に達すると自然に鎮火していたそうです。しかし、乾燥化が進む近年は、焼畑の火が森の中にどんどん燃え広がっていって手に負えなくなる。小さな火やちょっとの火の粉が大火災の火種になる。そういう状況です。焼畑にする場所の周りに落ち葉1枚残さない防火帯を数メートル幅で築いてからでないと火入れができない。数千年間続いてきた伝統の火入れの方法が、いまは行えなくなってしまいました。

写真20　乾いた落ち葉のすぐ下に砂地が広がる保護区の森の林床　（2018年筆者撮影）

写真21　木立のない場所には赤茶けた砂地が剥き出しに　（2018年筆者撮影）

Ⅶ. 消費者として果たすべき責任

では、ブラジルの輸出品は世界のどこへ向かっているのでしょうか。2022年は、輸出牛肉のうちの68.6パーセント、輸出大豆の71パーセント、輸出鉄鉱石の63パーセントが中国向けでした。中国国内で全部を消費しているとは限らないわけで、輸入材料を使用した加工品を日本は中国から輸入しているはずです。原材料をひとつひとつたどっていくと、どこに行き着くのか。現代はなかなか分かりにくい時代です。しかし、自分たちが消費しているものが、いったいどこで、どんなふうに作られたものなのか、消費者としてそれを知る責任は大きいです。日本との深いつながりとしては、アマゾンにおけるアルミニウム開発に日本はODAを投入して参画しました。また、アマゾンのカラジャス鉱山。世界最大の鉄鉱石鉱山です。この開発にも日本はODAで参加しました。

集会の会場では、金の違法採掘問題に苦しむムンドゥルク民族の女性リーダー、アレッサンド

写真22　ムンドゥルク民族のリーダー、アレッサンドラ・コラピ　（2023年筆者撮影）

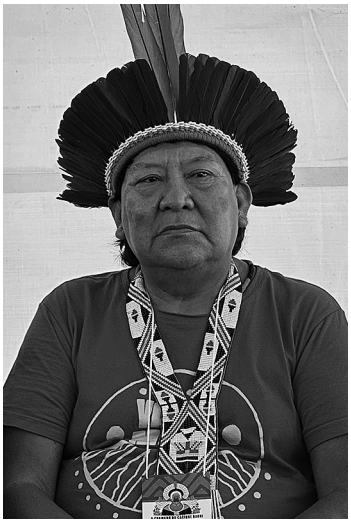

写真23　ヤノマミ民族のリーダー、ダビ・コペナワ　（2023年筆者撮影）

ラ・コラピ（**写真22**）が「水俣病を知る日本の人たちに伝えてほしい」と言ってインタビューに答えてくれました。「私たちが暮らす森でも、金の違法採掘によって水銀が垂れ流され、水俣病が起きるのではないかと心配している。金を買う前に、いったん立ち止まって考えてほしい。この金は一体どこから来たんだろうかということを」と訴えていました。アレッサンドラは違法採掘業者から殺害予告を何度も受けながらも、この問題を内外に訴え続けています。それが評価されて今年4月に「環境分野のノーベル賞」とも呼ばれるゴールドマン環境賞を受賞しました。

やはり金違法採掘問題が深刻なヤノマミ民族のリーダーのダビ・コペナワ（**写真23**）も、同じことを訴えていました。また、サバンナ地域のグアラニ・カイオワ民族は、先住の土地への権利がいまだに認められていません。大農場主との土地紛争が深刻で、これまで多くのリーダーが殺し屋などに襲われて命を落としてきました。そこで作られた大豆を私たちは消費しているかもしれない。彼ら、彼女らの切実な声を聞いて、私たちとブラジル、私たちとアマゾンとのつながりをとても強く考えさせられました。

先住民族リーダーたちは、アグリビジネスを全否定しているわけではありません。昨年9月にソニア・グァジャジャラをインタビューする機会を持ちましたが、彼女は「法令、規則を遵守して違法行為を止めろ」と求めていました。そして「現在のアグリビジネスは持続可能ではない。いまのあり方を続ければ、乾燥化、高温化、土壌の荒廃などの環境破壊が進み、農業そのものができなくなる未来しかない」と訴えていました。

消費者としての責任ですが、たとえば市販の牛乳の乳脂肪率について考えてみましょう。いまは乳脂肪率が3.6〜3.7パーセントですよね。乳脂肪率が高いほうが高品質の牛乳だというイメージで、どんどん上がってきました。私が子どもの頃は3.3パーセント前後だったように記憶しています。生乳の乳脂肪率を上げるには、飼料に穀物をたくさん与えなければなりません。トウモロコシや大豆です。けれど、私たち消費者にとって、0.1パーセントや0.2パーセント分のこだわりが果たして本当にあるのでしょうか。3.5パーセントではだめだ、3.6パーセントでないと嫌だと言いたいでしょうか。そのためにどれだけの穀物を輸入しなければならないのか。いま、穀物飼料の輸入価格が高騰して酪農家が苦労されています。自然環境を含め、皆が苦しまないような

写真24　日本の農村では耕作放棄地が年々拡大している
（2011年筆者撮影）

食や農のあり方を考えていかなければならないと思います。

これは私が借りている棚田の以前のようすです（**写真 24**）。30 年間近く耕作放棄されて、このように草だらけだったのをお借りして、藪を払って崩れた土手を直して復田して、移住者なかまたちでシェアして耕作しています。アマゾンから日本の里山に戻ってくると、耕作放棄地が広がり、杉の植林地は荒れ果てて、竹藪がどんどん広がっていく風景が目に飛び込んできます。けれど気候は湿潤で穏やかで、土は黒く有機質たっぷりに肥えています。アマゾンの赤茶けた砂漠のような所から帰ってくると、ここはなんて豊かな土壌なんだろうと思うんですよね。けれど、中山間地で農業をやるよりも、輸入したほうが安いからこうやって耕作放棄地が増えていく。

集会を主宰したラオニ長老が数年前に私につぶやいた言葉があります。「日本はあんなに小さな島国だから耕す土地もないのだろう。だから遠いアマゾンの森を壊してまで作る大豆がそんなに欲しいんだね」と彼は言いました。

小さな島国であるのはそのとおりですけれど、こんな豊かな土壌に耕作放棄地が広がり、農村では過疎化高齢化が進み、限界集落と呼ばれるようになっている。それでも地球の反対側にあるアマゾンの森を壊して作ったものを、はるばる運んでくるほうがずっと安い。これがまさに経済のグローバリゼーションですけれども、安さのみを選択の基準とするならば、自然をひたすら破壊していくしかないわけです。しかし、安さだけではない価値基準が絶対に必要です。そこに私たち消費者も責任を負っているということを、集会では強く実感しました。

ラオニ長老が集会の壇上から、「私にはもう先祖たちの霊がお迎えに来ている。だから君たち若い世代が、私の生涯をかけた闘いを受け継いでいってほしい」と語りかけていました。非先住民族である私たちもまた、「森を守れ」というメッセージをラオニから託されたひとりであると受け止めています。本日はありがとうございました。

〈註〉

1 Folha de São Paulo
https://www1.folha.uol.com.br/ambiente/2023/08/brasil-tem-areas-que-ja-estao-ate-30c-mais-quentes-aponta-analise-do-inpe.shtml

2 UOL Notícias
https://noticias.uol.com.br/colunas/carlos-madeiro/2023/11/11/brasil-registra-pela-primeira-vez-regioes-aridas-de-deserto.htm

3 https://plataforma.brasil.mapbiomas.org/

（しもごう　さとみ　ジャーナリスト）